

岩手医科大学の軌跡(2)—医育の黎明—

平林香織、芳賀真理子、渡邊 剛

1 はじめに

岩手医科大学は平成29年4月に開学120周年を迎える。大学ではその歩みを以下の6期に区分している。

| | | | |
|-----|-----|--------------------------------|---------|
| 第1期 | 草創期 | 明治30年(1897) 4月～昭和2年(1927) 12月 | 医学校付設 |
| 第2期 | 黎明期 | 昭和3年(1928) 1月～昭和17年(1942) 3月 | 医学専門学校 |
| 第3期 | 揺籃期 | 昭和17年(1942) 4月～昭和30年(1955) 12月 | 新制医科大学 |
| 第4期 | 拡充期 | 昭和31年(1956) 1月～昭和62年(1987) 12月 | 拡充計画 |
| 第5期 | 発展期 | 昭和63年(1988) 1月～平成19年(2007) 3月 | 第2次拡充計画 |
| 第6期 | 躍進期 | 平成19年(2007) 4月～平成29年(2017) 3月 | 薬学部開設 |

前稿では、草創期における創立者三田俊次郎の事績を中心として、岩手病院の開院に至る経緯と岩手病院に付設された岩手医学校の実態を検証したが、本稿では、それに続く黎明期を扱う。黎明期は、三田俊次郎を校長として昭和3年(1928)に岩手医学専門学校(以下、岩手医専)が開学してから、昭和17年4月に台北帝国大学総長だった三田定則を第2代校長に迎えるまでの15年間である。三田俊次郎は昭和17年(1942)9月に80歳で没する。

草創期には本邦の医師養成制度の混乱に翻弄され、医学校閉校に追い込まれた。しかし、医師不足の岩手県の医療を支えるために県内での医師養成は必須であり、専門学校開学は俊次郎のみならず、関係者及び岩手県民の悲願であった。

まずは、簡単に黎明期の流れを総括してみよう。

初代校長俊次郎は、病院の建物や校舎を建設し、病院及び学校の基礎固めを行った。学校校歌・校章・学生歌などが定められ、進取の気性に富む学徒らが全国から集結した。学校も学生も救生済民の思いは1つであった。ちょっとした行き違いからの紛争(後述する同盟休校事件)も、今振り返れば両者の医育への情熱の噴出だったことがわかる。

やがて学校経営は軌道に乗り、定員が全校480名から600名に増員された。岩手県医師会、岩手医学会、盛岡医師会が発足し、俊次郎をはじめとする本学医師らが中枢を担い、岩手県の医学の新興に粉骨していく。

本稿では、岩手医専開学前後の動静を検証した上で、入学式直後に本学で行われた後藤新平講演「現代ノ医学」を紹介する。そして、開学期のトピックとして同盟休校事件について述べたい。また、特徴的な活動として衛生検査部の事績を紹介する。後藤新平の「現代ノ医学」については、奥州市立後藤新平記念館に原稿が残っていることがわかり、同館に閲覧と翻刻掲載の許可をいただいた。同盟休校事件にまつわるできごととは、歴史の中に埋もれてその詳細が不明であった。今般、120周年記念事業の一環として記念出版物を作成するにあたり、ばらばらに保存されていた資料を一堂に並べることで、いくつもの点が線となってつながり、いろいろなことが明らかになった。それらをここに書き残しておく。

2 岩手医学専門学校開学前夜

明治維新直後から大正期を経て第二次世界大戦後に新制大学の制度が整えられ、医師国家試験が導入されるまで、試行錯誤の繰り返しだった。その動きは、坂井建雄らの「総説 我が国の医学教育・医師資格付与制度の歴史の変遷と医学校の発展過程」(『医学教育』Vol.41(2010))で明瞭に説明されているので参照されたい。

そして、明治16年(1883)に施行された「医師免許規則」の第1条から第3条までに医師免許の要件が書かれている。

第一条 医師ハ医術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免許ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル医術開業ノ証ハ仍ホ其効アリトス

第二条 開業免許ヲ得シトスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方県ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第三条 官立及府県立医学校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免許ヲ得シコトヲ願出ツルトキハ内務卿ハ試験ヲ要セスシテ免許ヲ授与スルコトアルヘシ

明治38年(1905)この規則の第3条の「官立及府県立医学校」が「官立及公立ノ医学校並文部大臣ノ指定シタル私立医学専門学校」に改正される。そのうえで、大正5年(1916)の医術開業試験廃止、大正7年(1918)の大学令が出され、以後、医学部の増設や医専の新設などが行われるようになる。岩手医専は、そのような時代の趨勢のなかで開学する。

大正7年(1918)の時点の医学校は、帝国大学医学部4校(東京、京都、九州、東北)、公立医科大学が1校(大阪)、公立医学専門学校が2校(京都、愛知)、私立医学専門学校が5校だった(慶應、東京慈恵会、日本、東京女子、熊本)。以上17校に対し、上級学校への昇格や新設が続き、昭和3年(1928)には本学のほかに、大阪女子医学高等専門学校(現・関西医科大学)、九州医学専門学校(現・久留米大学医学部)が開設され、翌昭和4年(1929)には、大阪高等医学専門学校(現・大阪医科大学)が新設される。

昭和3年(1928)2月16日の『岩手毎日新聞』には、「設立認可された岩手医学専門学校」の三段抜きの見出しと、俊次郎の写真と「医術は済生の根本、良医を養成して新付の蒼生を慈恵せよ」という俊次郎のことが掲げられる(写真1)。「工事を急ぐ岩手医専の校舎」というキャプションとともに、工事中の校舎の写真が紙面に大きく掲載されている(写真2)。この校舎の設計者は、岩手病院診療棟(現、本学1号館)と岩手医専附属医院本館(現、本学二号館)と同じ葛西萬司である。

記事には、2月14日に文部大臣の認可が下り、俊次郎が「校長事務取扱」として認可され、阿部康蔵(独逸語)、佐藤尚二(解剖学)、笠間政吉(体操)の3名の教員任用が認可されたとある。

記事には、2月14日に文部大臣の認可が下り、俊次郎が「校長事務取扱」として認可され、阿部康蔵(独逸語)、佐藤尚二(解剖学)、笠間政吉(体操)の3名の教員任用が認可されたとある。

そして、俊次郎の談話として次のような記事が掲載される。長くなるが、新学校創設に向けての俊次郎の意気込みが伝わってくるので全文を引用する。

やあ、是は態々恐縮でした私もお蔭で重荷を卸したやうな感じがします。私の常に考へてゐることですが人間として一番に悲痛なのは一日病に冒された時充分なる医療を為し得ぬ事であります。医薬の機関



写真1

写真2

や施設が完備して居らぬとどんなに金を積んであても貴い命を喪ぶに至るのです。医者や沢山養成するといふことは金銭の問題ではなく当に人道上経世上の大問題であります。医者か沢山になれば需要供給の原則から迅速に比較的やすい料金でみて貰えるのであるそんなに沢山医者を養成したら遠からず医者の失業者を出すことになるのではないかと心配して呉れる人もあるが是は皮相の見解で内地はしばらく措くとして台湾、北海道、樺太、朝鮮や更に満州関東州といふ方向へ眼を転するならば医師の発展すべき天地は寔に^{まさ}広大たといはねばなりません。朝鮮や樺太など附の領土や我国の保護下に在る満州、関東州や又最も親い隣邦支那の如きは医術が発達してゐないためどんなにか人生の最大悲惨事を体験しつつあるか量り知られぬのであります。東洋の盟首、仁義の国として世界に誇る我国は先づ第一に良い医者をどんどん送って彼等を教化し徳化することが最も喫緊の事であらうと思ひます是は私一己の考へかも知れませんがどうも今日の学校教育は左程もない外国語を偏重する嫌ひがありはしまひかと思ふ。学者となつて欧米各国に遊学する者はいざ知らず内国に^{とど}駐まつて主として邦人の診療に従ふ者には大して外国語の教養はいりませんで私は理想として最も有効な教授法によつて我が国語を教育し一には修業の年限を短縮し一面には生徒の無益な努力を減じたいと思つております。この主義から本春施行の入学試験科目も国語漢文を選び外国語は省きました医学専門の設置を計画したのは一昨年の秋でその年の県会に知事と県会議長宛に県立医学設置の請願書を提出しましたがいろいろの事情で実現不能となり更に市当局にも相談して見ましたが有耶無耶になつて了つたので、それでは一つ県や市の援助を得て自分でやつて見ようと決心し昨昭和二年十月月上旬に夫々関係筋に手続を為し今回やうやく認可された訳であります。何分にも私は御承知の通り資力は足らず知恵は無しそれに老齢なものですから果してうまくやり通せるかどうか甚不安におもはれますが地方官民の方々の御後援によつて是非所期の目的を達したいものと存じております

まず、医師養成が「人道上経世上の大問題」であることが説かれ、当時の国勢に鑑みて、国外にも目が向けられている。大陸各地を「我国の保護下に在る」と断じたり、我が国を「東洋の盟主」と言ったりする物言いは時局に傾いたもので、現代の感覚とは一線を画するものであることは致し方ないだろう。注目すべきは、日本人の診療には、「有効な教授法によつて我が国語を教育」する必要があることを強調している点である。そのような理由により入学試験に国語と漢文を課していることが語られている。また、今日のようなグローバル社会にあつては医療人にとって英語は必須の科目であるが、医者はまず自国語をしっかりと理解し正しく使えることが大切であるとの考え方は、看過しがたいものである。医師養成のために当初は県立の医学校を考え、県知事や県議会に嘆願書を提出していたことも語られている。さまざまな事情で県立の医学校が実現できないことがわかり、盛岡市に相談したけれどももちがあかず、「それでは一つ県や市の援助を得て自分でやつて見ようと決心し」たことが語られている。「資力は足らず知恵は無しそれに老齢なものですから果してうまくやり通せるかどうか甚不安におもはれますが」と、結びの部分では弱気な態度をみせている。ここにいたるまで、出鼻をくじかれたり、梯子を外されたり、物心両面にわたるさまざまな苦勞があつたことを想像させる物言いである。現在本学に伝えられている俊次郎のことばは強気なものが多く、信念をもってなりふり構わずがむしゃらに突き進んでいく人物像が定着しているが、内実は意外とそうではないのかもしれない。

さて設立認可が下りたのが2月であるから、早急に学生募集を開始しなければならない。現在は、4月入学生の学生募集は11月の推薦入試からはじまり、2月上旬には本試験が終わっているのが通例である。学生募集要項は前年の春には公表される。それに比べると至って遅いスタートである。3月16日には『岩手日報』に生徒募集の記事が掲載されている。記事には、募集人員が120人であること、開校は4月中旬、願書受付は3月25日までであると書かれている。

入学試験は翌月4月9日、10日に、盛岡、東京、京都を会場として行われた。120名の募集定員に対して、志

願者総数は1,001名に上った。結局合格者は157名、受験者数に対する倍率は6.4倍の狭き門であった。『岩手毎日新聞』昭和3年(1928)4月9日付記事は盛岡会場のようすを大きく伝えている(写真3)。



写真3

入試科目は国語(漢文を含む)、代数、日本史の3科目、それに口頭試問が課された。問題は次のとおりである。

【国語】(1時間)

一 左記全文ヲ解釈シタル上傍線ヲ施シタル字句ニ仮名ヲ付シ且ツ其意義ヲ解釈せよ。

今度の大地震災は成金国の日本を僥倖と虚栄とで腐爛せしとしてみた日本を首府東京をして之を代表せしめ大懲罰の鉄槌を真向に打下し身心共に微塵に打碎き赤裸々の原真に帰らしむるの機会を供してゐるのだが我が同胞は此呪を転じて大祝福とするの工夫を怠ってはならぬ。かの全国に瀰漫しつつあった僭上、虚栄、驕奢、退廃、浮靡、軽佻、自大、懦弱等の百悪千弊を矯治掃蕩するの機は此の驚魂、駭魄して少しく原真に目覚めんとしめしある現下を外していつの時にあらふか

二 左ノ文章ヲ平易ニ解釈セヨ

身に過ある人のおのれと咎を知るものは心の鬼にさいなまれて年月たしなみもて行くほどに悪しき習は跡なく消え失せ心ばせもよくなるものなり

【漢文】(1時間)

左記一・二・三の文章に送仮名を付け且各別に之を解釈せよ。

一、所見所期不可不遠且大。然行之亦須量力有漸。志大心劳力小任重。恐終敗事。

二、孔子曰。君子食無求飽。居無求安。

敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也已。

三、水戸義公平生好學。其著作纂述不可勝數。大日本史之作尤為不朽大典。其體裁筆削。必與史臣反復商量。歸諸至當。一生用心半在此書。於是皇統之正閏。人臣之忠好。昭然明白。不復容疑矣。

四、左の句を簡明に解釈せよ。

1 下剋上 2 三人行必有我師 3 天網恢恢疎而不漏 4 干羊之皮不如一狐之腋

【代数】(90分)

- 1) $x^3 + mx^2 - 20x + 6^3$ ガ ニテ整除セラルル様ニ m ノ値ヲ定メヨ
- 2) $x^3 + 4 > C^2 - 7x - 10$ ヲ因数ニ分解セヨ
- 3) $\frac{x}{n} = \frac{y}{b} = -$ $x + y + z = n$ ヲ解ケ
- 4) $4x^2 + kx + 20 = y$ ガ等根ヲ有スルナラバ其値如何又 k ノ値ヲ求メヨ
- 5) 甲乙ノ病院ニ於ケル収容患者数ノ比ハ A : B 其ノ内入院中死亡セシモノノ数ノ比ハ a : b 退院セシモノノ数ノ比ハ c : d ナリト云フ各病院ニ於ケル死亡者ト退院トノカズノ比ヲ求メヨ但シ死亡者以外ノモノハ退院セルモノトス

【幾何】(90分)

- 1) 三角形ABCノ頂角Aノ二等分線ト辺BCノ垂直二等分線トノ交点をDトシ、Dヨリ辺AB、AC (若シクハ延長) ニ夫々垂線DPヲ引キP、Qヲ其足スレバBPトCQトノ長サガ相等シキコトヲ証セヨ
- 2) 三角形ノ外接円周上ノ任意ノ一点ヨリ其三辺若シクハ延長ニ下セル垂線ノ足は同一直線ニアルコトヲ証セヨ
- 3) 与ヘラレタル三角形内ノ一定点ヲ通シ一直線ヲ引キテ其面積ヲ二等分セントス 如何ニスベキヤ

【歴史】(1時間)

- 一 儒教及仏教ハ日本ニ於テ国民精神上如何ナル影響ヲ与ヘタルヤ
- 二 蘭学ノ発達ニ就キテ述ベヨ
- 三 左記ニ就キテ知ル所ヲ記セ
イ 紀貫之 ロ 正岡子規 ハ 福沢諭吉 ニ 中朝事実

晴れて合格した第1期生の出身地は、台湾、朝鮮を含む北は北海道から南は鹿児島まで32道府県に及んでいた(表1)。岩手県出身者が38人と一番多く、次いで宮城県28人、山形8人、北海道7人、青森と埼玉が6人ずつ、新潟・長野・京都が5人ずつといった具合である。

また、出身学校ごとの合格者内訳は表2のとおりである。

| 出身地 | 人数 | 出身地 | 人数 | 出身地 | 人数 | 出身地 | 人数 |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| 北海道 | 7 | 群馬 | 1 | 大阪 | 1 | 徳島 | 1 |
| 青森 | 6 | 埼玉 | 6 | 京都 | 6 | 山口 | 1 |
| 秋田 | 3 | 千葉 | 1 | 石川 | 1 | 福岡 | 1 |
| 岩手 | 38 | 東京 | 4 | 長野 | 5 | 佐賀 | 2 |
| 宮城 | 28 | 神奈川 | 1 | 富山 | 1 | 大分 | 2 |
| 山形 | 8 | 山梨 | 1 | 岡山 | 1 | 鹿児島 | 1 |
| 福島 | 3 | 静岡 | 2 | 兵庫 | 2 | 台湾 | 2 |
| 新潟 | 5 | 愛知 | 2 | 広島 | 1 | 朝鮮 | 4 |
| 栃木 | 3 | 三重 | 3 | 香川 | 2 | | |

表1 合格者出身地内訳

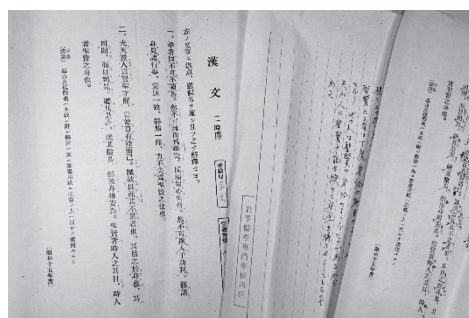


写真4 昭和15年の入試の漢文の答案

『岩手医専学校要覧』によるデータであるが、合格者157名のうち56名が卒業していないということになる。ちなみに、5カ年の入学者数と卒業生数、留年者数を一覧にまとめると表3のようになる。入学後、4分の1から3分の1の学生が4年間で卒業できていない。場合によっては、留年して学生が入れ替わっている可能性もあるし、何らかの事情があって退学した学生もいるだろう。いわゆるストレート進級卒業率は平均74%である。ちなみに現在の岩手医科大学医学部の過去5年間のストレート卒業率は79.0%である。

| 出身地 | 学校名 | 人数 | 出身地 | 学校名 | 人数 | 出身地 | 学校名 | 人数 |
|-------------|--------|------|--------|-------|---------|--------|------------|--------|
| 北海道 | 函館中学 | 3 | 福島 | 会津中学 | 1 | 愛知 | 熱田中学 | 1 |
| | 北海中学 | 1 | | 喜多方中学 | 1 | | 東海中学 | 1 |
| | 札幌第二中学 | 3 | | 新潟 | 相馬中学 | 1 | 大阪 | 生野中学 |
| 青森 | 弘前中学 | 1 | | | 村松中学 | 1 | | 京都 |
| | 青森工業 | 1 | 新潟中学 | | 2 | 立命館中学 | 2 | |
| | 青森中学 | 2 | 高田中学 | | 1 | 桃山中学 | 1 | |
| | 八戸中学 | 1 | 佐渡中学 | 1 | 京都中学 | 1 | | |
| | 三本木農学校 | 1 | 栃木 | 太田原中学 | 1 | 京都第二中学 | 1 | |
| 秋田 | 横手中学 | 2 | | 宇都宮中学 | 1 | 三重 | 宇治山田中学 | 1 |
| | 秋田中学 | 1 | 足利中学 | 1 | 真宗勸学院中学 | | 2 | |
| 岩手 | 盛岡中学 | 25 | 群馬 | 太田中学 | 1 | 兵庫 | 姫路中学 | 1 |
| | 岩手師範 | 4 | | 埼玉 | 粕壁中学 | | 1 | 龍野中学 |
| | 一関中学 | 5 | 熊谷中学 | | 2 | 岡山 | 金川中学 | 1 |
| | 福岡中学 | 2 | 川越中学 | | 1 | | 広島 | 広島第二中学 |
| | 蠶業学校 | 1 | 本庄中学 | | 1 | 山口 | | 長府中学 |
| | 遠野中学 | 1 | 不動岡中学 | | 1 | | 徳島 | 徳島中学 |
| | 宮城 | 古川中学 | 1 | 千葉 | 沼田中学 | 1 | | 香川 |
| 栗原農学校 | | 1 | 東京 | | 明京中学 | 1 | 盡誠中学 | |
| 築館中学 | | 3 | | 芝中学 | 1 | 福岡 | 中学明善校 | 1 |
| 東北学院中学 | | 1 | | 京北中学 | 1 | | 亀谷中学 | 1 |
| 仙台第一中学 | | 9 | | 法政大1年 | 1 | 佐賀 | 三養基中学 | 1 |
| 東北中学 | | 3 | 神奈川 | 藤澤中学 | 1 | | 大分 | 中津中学 |
| 佐沼中学 | | 4 | | 静岡 | 榎原中学 | 1 | | 宇佐中学 |
| 第二高等学校1学年修了 | | 1 | 濱松第一中学 | | 1 | 鹿児島 | 加治木中学 | 1 |
| 仙台第二中学 | | 4 | 山梨 | 身延中学 | 1 | | 台湾 | 台湾商工学校 |
| 石巻中学 | | 1 | | 都留中学 | 1 | 新竹中学 | | 1 |
| 山形 | 山形中学 | 2 | 長野 | 松本中学 | 1 | 朝鮮 | 平壤崇實大学 | 1 |
| | 米澤中学 | 2 | | 上田中学 | 1 | | 京城中央高等普通学校 | 1 |
| | 新庄中学 | 2 | | 長野中学 | 3 | | 咸興公立農学校 | 1 |
| | 鶴岡中学 | 1 | 石川 | 金澤中学 | 1 | | 齒科医専1年修了 | 1 |
| | 酒田中学 | 1 | | 富山 | 富山中学 | 1 | (名) | |

表2 第1期生出身学校内訳(『岩手医学専門学校要覧』より)

| 入学年 | 期別 | 入学者数 | 卒業年 | 卒業対象 | 卒業生 | 留年生 |
|------|------|------|-------|------|-----|-----|
| 昭和3年 | 第1回生 | 157 | 昭和7年 | 157 | 101 | 56 |
| 昭和4年 | 第2回生 | 121 | 昭和8年 | 177 | 141 | 36 |
| 昭和5年 | 第3回生 | 144 | 昭和9年 | 180 | 137 | 43 |
| 昭和6年 | 第4回生 | 134 | 昭和10年 | 177 | 138 | 39 |
| 昭和7年 | 第5回生 | 134 | 昭和11年 | 173 | 116 | 57 |

表3 創立期の卒業生数

3 岩手医学専門学校のスタート

『岩手日報』(昭和3年<1928> 3月28日及び同7月1日付)は、入学式は4月28日仮校舎で行なわれ、7月1日には開校式と祝賀会が「岩手病院新館楼上」で来賓200余名を招待して盛大に挙行されたと報じている。「三田校長より入学生一同に訓示を行ひ同十一時終了した」という記事が掲載された。第1期生卒業アルバムには入学式の写真が掲載されている(写真5)。校旗が掲げられ、壇上では白手袋の紳士が祝辞を述べている。左手前に教職員が並び、学生服姿の親友性が壇上に向かって整列している。



写真5

『学校要覧』をみるとどのような教育を行っていたかがわかる。まず、学則第1章総則第1条には教育目標として「医学ノ教授」

と「徳育」が掲げられている。総則の全文は以下のとおりである。

第一条 本校ハ実際医学ノ教授並ニ研究ヲナ併セテ徳育ヲ涵養スル所トス

第二条 本校ノ修業年限ハ四年トス

第三条 学年ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第四条 学年ハ左ノ三学期ニ分ツ

第一学期 四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二学期 九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三学期 一月一日ヨリ三月三十一日至ル

第五条 年中休業日ハ左ノ如シ

一、日曜日 大祭祝日

一、招魂祭

一、県社桜山神社祭典

一、開校記念日

一、県社八幡神社祭典

一、春季休業 自三月二十五日 至四月七日

一、夏季休業 自七月二十一日 至八月三十一日

一、冬季休業 自十二月二十五日 至翌年一月七日

修業年限4年の3学期制である。休業日に「招魂祭」や桜山神社や八幡神社の祭典の日が当てられているところに時代の色が見える。

学則第2章には開講科目一覧が掲載される。開講科目は以下のとおりである。

教養科目：修身 独逸語 体操

基礎医学：解剖学 生理学 医科学 衛生学 細菌学 病理学 薬物学 法医学

臨床医学：内科学 外科学 皮膚病学 耳鼻咽喉科学 眼科学 産婦人科学 精神科学 小児科学

専門科目が17科目、それ以外は、修身と独逸語と体操である。すべての学年に「修身」の時間があり、4年次には週2時間開講される。語学は独逸語が課されており、第1学年では週に8時間、第2学年では週に6時間、第3学年、第4学年では週に5時間開講されている。かなりの時数である。教養科目としてはほかに体操が各学年週に2時間ずつとなっている。

第3学年になると内科学、外科学、皮膚病学、性病学、耳鼻咽喉科学、眼科学のいわゆる臨床実習がスタートする。第4学年では、それに加えて産婦人科学、精神科学、小児科学の臨床が行われた。「病理解剖実習」が「時々」行われ、各診療科での「外来患者臨床講義」が「不定時」とあるのも目を引く。

学則第3章は入学と在学の要件を記載する。第8条が入学要件である。

本校ニ入学セントスルモノハ身体健康、品行方正ノ男子ニシテ左記ノ一ニ該当スルコトヲ要ス

一、中学校卒業生

二、専門学校入学検定規定ニ依ル試験検定ニ合格シタル者

三、同規程ニ依リ指定セラレタル者

「身体健康、品行方正ノ男子」となっている。「男子」の文字が修正され「品行方正ノ者」となるのは昭和

21年（1946）のことである。この年4人の女子学生が入学している。

また、第4章には休学、退学について、第5章には学資について記載される。

第四章 休学、退学

第十七条 疾病其他ノ事故ニヨリ欠席スル者ハ当日又ハ翌日中ニ其事由ヲ記シ届出ツヘシ

但シ一週間以上欠席スルトキハ（病氣ナラハ医師ノ診断書ヲ添ヘ）保証人連署ヲ以テ届出ツヘシ

第十八条 疾病其他ノ事故ニヨリ休学又ハ退学セントスルトキハ其事由ヲ詳記シ保証人連署ヲ以テ届出ツヘシ

第十九条 依願退学セシ者再入学ヲ願出ツルトキハ詮議ノ上、原級以下ニ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第二十条 左ノ各項ノ一ニ該当スルモノハ除名スルコトアルヘシ

- 一、正当ノ理由ナクシテ一ヶ月以上引続キ欠席セシ者
- 二、出席常ナラサルモノ
- 三、学力劣等ニシテ成業ノ見込ナキ者
- 四、性行不良ニシテ改善ノ見込ナキ者
- 五、引続キ一ヶ年以上欠席セシ者

第五章 学資

第二十一条 入学検定料ハ金十円トシ入学科ハ金十円トス

第二十二条 授業料ハ年額百五十円トシ左ノ三期ニ分チテ之ヲ徴収ス

第一期 四月十日マテ

第二期 九月十日マテ

第三期 一月十日マテ

但シ年額ヲ一時（第一期納期）ニ納入スルコトヲ得

第二十三条 定期日内ニ学資ヲ納付セサルモノハ未納中停学ヲ命シ尚停学日数三十二及フモノハ除名ス

第二十四条 在学中ハ仮命休学停学中ト雖授業料ヲ免除セス

但シ兵役ノ為メ休学スルモノハ此限りニアラス

第4章第19条の再入学制度や第5章第24条の兵役による休学に関する規定は、臨機応変な対応といえる。一方、第4章20条は出席・成績・性行の不良者に対して「除名スルコト」があるという厳しいものだ。

学資に関して、検定料、入学金が10円、授業料が年額150円、3期分納もしくは全納となっている。現代の貨幣価値は当時の620倍である。150円は現代の93,000円に相当する。社会のしくみや経済の動向が大きく変わっているので単純に比較はできないが、逆説的に高度先進医療と医育の進展を物語るものだ。

このような学則によりスタートした岩手医専の初代教授陣は次のとおりである。（表4）

| | | | |
|---|---|--|---|
| <p>佐藤三千三郎 医学博士、 初代付属病院長 明治24年8月1日新潟県生 内科学教授 岩手医専名誉教授 昭和50年2月8日逝去</p> | <p>明治42年 第四高校卒業 大正6年 九州医科大学卒業 大正13年 岩手病院内科部長着任(33歳) 大正14年11月から1年間 渡欧研究 昭和3年 岩手医専附属病院長 内科学教授 昭和18年 岩手医専名誉教授 昭和20年 横浜医専講師 佐藤内科診療所(横浜市) 昭和29年年横浜内科学会初代会長</p> | <p>村上幸次 医学博士 山形県鶴岡市出身 解剖学教授</p> | <p>昭和2年 東北帝国大学医学部卒業 昭和3年 着任 解剖学教授 昭和5年 退職 昭和5年 医学博士 昭和5年 耳鼻科医院開業(秋田市) 昭和7年 荘内医学会入会</p> |
| <p>副島鎮雄 医学博士 明治30年1月17日生 岩手病院外科部長 外科学講座教授</p> | <p>大正11年 九州帝国大学医学部卒業 大正12年 九州帝国大学医学部外科 昭和3年 医学博士 昭和3年 岩手病院外科部長 昭和4年 外科学教授 昭和13年 退職 医療法人同愛会副島医院開業(佐賀市) 佐賀市医師会2代目会長</p> | <p>遊佐良雄 医学博士 金ヶ崎町出身 岩手病院眼科部長 岩手医専教授</p> | <p>盛岡中学 旧仙台二校 大正13年 東北帝国大学医学部卒業 大正14年 岩手病院眼科部長 昭和4年 岩手医専教授 東北帝国大学医学部法医学教室 昭和9年 学位取得 昭和9年 大塚病院眼科科長(東京) 昭和12年 開業(本郷) 昭和15年 開業(黒沢尻町) 和賀郡医師会長 県医師会副会長 菊池知勇門下「ぬはり」同人</p> |
| <p>登倉達雄 医学博士 岩手病院産婦人科部長 産婦人科教授</p> | <p>大正10年 九州帝国大学医学部卒業 大正10年 九州帝国大学医学部第三内科 大正11年 同 産婦人科学教室 大正11年 同 助手 昭和2年 同 講師 昭和3年 岩手病院産婦人科医長着任 昭和4年 産婦人科教授 昭和5年 退職 昭和20年 館山市在住 昭和27年 安房医師会監事</p> | <p>小泉浩吉 南満医学堂医学士 明治30年富山県生 教務主任 制服ボタン図案 (鶴巻模様)作成</p> | <p>大正9年 南満医学堂卒業 満州医科大学 昭和4年 医化学教授 昭和8年 東北帝国大学医学博士 昭和14年 退職 東京でアルカロイドの研究</p> |
| <p>鈴木直吉 農学士 解剖学教授 学生歌作詞</p> | <p>仙台二高 東京 大学農学部水産学科卒業 東北 大学医学部助手 昭和3年 着任 昭和5年 退職 昭和16年 満州医科大学教授 広島大学教授 昭和35年 解剖学教授(再) 昭和38年 退職</p> | <p>金野巖 医学博士 明治36年10月5日 岩手郡大更村生 岩手病院耳鼻咽喉科部長 岩手医学専門学校教授 5代附属医院長 岩手医科大学名誉教授 昭和40年3月29日逝去</p> | <p>県立盛岡中学4年で新潟高等学校に進学 大正15年 新潟医科大学医学科卒業 大正15年 岩手病院医員 東京帝国大学副手(嘱託) 昭和2年 岩手病院耳鼻咽喉科部長 昭和3年 着任 昭和4年 耳鼻咽喉科学教授 昭和5年 新潟医科大学研究科 耳鼻咽喉科教室副手 昭和7年 医学博士学位授与 昭和25年 5代附属医院長 昭和31年 病気のため休職 昭和33年 岩手医科大学名誉教授 昭和23年 第1回岩手日報文化賞受賞</p> |
| <p>多田兵蔵 医学博士 生理学教授</p> | <p>大正15年 東北帝国大学医学部卒業 大正15年 同生理学第一講座 昭和3年 岩手医専生理学教授 昭和6年 医学博士 昭和9年 退職 東北帝国大学講師(生理学の内分秘) 昭和17年 開業(仙台市) 植物性生理学(動物性機能は東北大に依頼)</p> | <p>三田三郎 法学士 独逸語科教授・学校主事</p> | <p>昭和3年 独逸語科教授・学校主事 昭和6年春～8年春 ドイツ留学 昭和21年 公職追放により退職 橘高校校長</p> |
| <p>阿部康蔵 盛岡市出身 独逸語科教授</p> | <p>東京外国語学校卒業 東京朝日新聞社 昭和3年 独逸語科教授 昭和6年 退職</p> | | |

表4

4 後藤新平講演「現代ノ医学」

さて、昭和3年開校式を2週間後に控えた6月17日、岩手医専に後藤新平がやってくる。水沢（現・奥州市）出身の後藤新平は、安政8年(1861)水沢藩士の家に生まれる。須賀川医学校で医学を修め、愛知県病院の医師となる。内務省衛生局長、台湾総督府民生局長、満州鉄道総裁、通信大臣、内務大臣、外務大臣、拓殖大学学長等を歴任し、大正9年(1920)、東京市長となり関東大震災後の帝都復興計画を推進する。晩年は、東京放送局長としてラジオの試験放送の第一声を担当したり、政治の倫理化運動の提言を行ったり、日露国交正常化に尽力した。事績も武勇伝も枚挙にいとまがない。

医師としての立場や観点が活かされたエピソードもいくつかある。明治15年(1882)板垣退助が岐阜で演説中に暴漢に刺されるという事件の際には、招電により愛知から岐阜へ急行し、外科医としての手腕を発揮した。県境を越えての治療は当時としては超法規的なことだった。台湾衛生局長時代の阿片漸禁策も、医者として依存症治療の困難を認識していればこそのものである。また、後藤の都市計画は、人体をイメージしたもので、道路を血管に見たて、大動脈としての幹線道路を基本にしたものだった。

国勢調査を導入したり、シチズン時計の社名を「市民 (citizen)」にちなんで考案したり、政治・社会・経済・文化、あらゆる方面にわたって我が国の近代化に貢献した。新聞社を作りたいという正力松太郎に自宅の土地を担保にして借金をして10万円を工面した。正力は後藤の葬儀の際にそのことを知り号泣したと伝えられる。そして、後藤の出身地水沢に20万円を寄付し公会堂を建設してほしいと申し出た。これが公民館第1号となる。

ボーイスカウトを日本に流入し、その初代総裁となっていた後藤新平は、昭和3年(1928)6月16日、盛岡でのボーイスカウトの大会に参加した。その翌日、ボーイスカウトの制服を着て本学を訪問し、開校式前の新入生に対し「現代ノ医学」と題して講演を行っている。71歳だった。その10か月後に東京から岡山向かう列車の中で脳溢血を再発、そのまま京都の病院で亡くなる。

奥州市の後藤新平記念館には、そのときの講演原稿と教室前の廊下で撮影した集合写真が大切に保管されている(写真6)。200字詰め原稿用紙42枚にわたる原稿は、秘書が浄書したものと思われるが、それを推敲した朱書きは後藤の筆跡だという(写真7)。



写真6

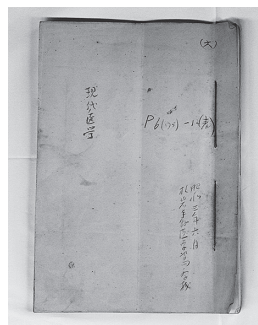


写真7

講演内容は、科学の進歩だけでは人体のすべてを解明することはできない、という物心一如の思想を説いたものだ。医学を学ぶ際には哲学的な視点で人間の心理を理解することが必要だと力説している。全体性を念頭に置いて、専門領域を学び、民衆のための実用的な学問として精進し、社会全体の幸福を生むことが医者としての任務であるとする。東京帝国大学がすべてではなく、岩手医専で学んでも志が高ければ立派な医師になることができる、精神が第一であると生徒を激励している。

本学には後藤新平の講演のようすを撮影した写真のほか、後藤新平揮毫の「宇宙在乎手万化存乎身」(「宇宙ハ手ニ在リ、万化ハ身ニ存ス」、89cm×175cm、医学部大会議室)「至人無己」(「至人ハ己無シ」86cm×175cm、歯学部会議室)と書かれた大きな扁額も残されている(写真8)。

後藤の母は、水沢藩の藩医の娘として高い教養をもち、和歌教訓集を暗記させて厳しくしつけたという。

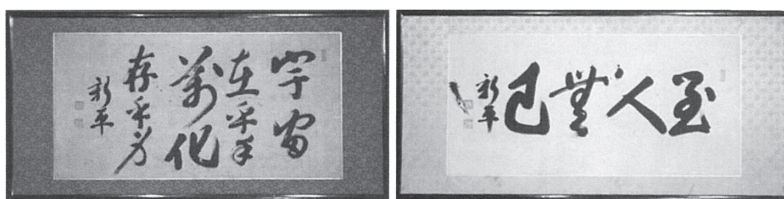


写真8 来校時に揮毫の扁額。左は1号館大会議室、右は歯学部会議室に掲げられている

幼いころから筆をもち、書を良くした新平は、折に触れて様々な言葉を様々な場所に書き残している。扁額の書はおそらく来学時に請われて揮毫したものと思われる。大会議室に掲げられる「宇宙在平手、万化在平身」は、宇宙のすべてが小さな掌の中にあり、物事の変化の理が、人間の体の中にある、という意味で、コスモス（宇宙）とミクロ（人体）を同一視し、宇宙的な無限の時間と有限の命との対比のなかに、宇宙の原理と人間の命の仕組みを見て取る思想である。鳥の目と虫の目の両方を兼ね備えることの重要性を表現したものであろう。また、歯学部会議室の「至人無己」とは『莊子』「逍遙編第一」の「至人無己、神人無巧、聖人無名」（至高の人は己にとらわれず、神のような人は功績にとらわれず、聖人は名誉にとらわれない）からとられた箴言である。無私の精神をもつ至上の医療人たれという激励のことばだ。

「現代ノ医学」は、岩手県出身の医師としての後藤新平が、岩手医専の開学を喜び、後輩たちに全人的医療人としての医学哲学を講じたものとして貴重なものであるから、巻末にその全文を翻刻する。

5 同盟休校事件

前節で第3学年になると臨床実習が増えるということを確認した。昭和5年(1930)、第1期生が3年生になったばかりの5月、新病院の建築が突貫工事で行われていた。臨床実習のための病院施設が整わないことに生徒たちは焦りを感じていた。臨床実習ができないのであれば、卒業後に医師免許が取得できないのではないか、そんな不安が生徒たちの間に広がったのである。そして、「岩手医学専門学校同盟休校事件」が起きた。以下が事件の顛末である。

- 7月5日(土) 卒業後の医師免許取得への不安から生徒代表13名が文部省の意向確認のために上京。
- 7月10日(木) 三田三郎主事が上京し、俊次郎の代理として文部省専門学務局長らと会見。施設設備完成実現促進について確認。
- 7月11日(金) 午前10時 学校側が11日・12日は休校とすることを発表
- 7月11日(金) 正午 全校生徒470名が公会堂第一ホールで生徒大会開催。学校の設備及び実習回数の改善・教授制度の確立等、教育環境の改善と附属病院の即時建設等の要望書決議。
- 7月12日(土) 午前9時三田校長が盛岡在住正副保証人370名を招集し経過説明。それを受けて保証人会開催し、生徒と学校の調停をすることを決議し、午後11時15分閉会。
- 7月14日(月) 16日までの臨時休校を決定
- 7月15日(火) 病院長佐藤三千三郎が岩手県知事に事情を説明。
- 7月18日(金) 臨時休校の期間をさらに3日間延長し、19日までとする。20日から夏季休暇なので、試験を第2学期に持ち越すことにする。この間父兄会が、調停を再三申し出るが生徒側拒否。午後1時10分、三田校長が県知事に経過報告。
午後4時、教授会開催。調停派と処分派で決裂、調停派の東北帝大系教授が離盛し仙台へ。
午後6時、校則第40条により盟休430名を無期停学処分。
- 7月18日(金) 事務長が仙台に赴き東北帝大医学部に事情説明。無期停学の報を受けた父兄が県内外から来盛。盛岡駅前に屯所を設置し、経過説明。
- 7月19日(土) 三田校長生母死去。生徒一同弔意を表し葬儀に参列。

7月25日(金) 全教授立ち合いのもと、三田校長と生徒が和解。生徒代表8名が謝罪文を提出し、口頭で陳謝。学校側は生徒の無期停学を解く。

生徒たちが文部省に押しかけたり、東北帝国大学出身の教授陣が仙台に引き上げたり、全国から心配した保護者が盛岡に集まってきたため盛岡駅前に臨時の交番が設置されたり、全校生徒470名のうち430名を停学処分にしたりと、わずか20日ほどの間に生徒や保護者が騒然となり、東奔西走した事件であった。しかしその経過を丁寧にたどっていくと、俊次郎の医育への思いは首尾一貫しており、学校側は関係各方面に時宜に応じた対応をしている。保護者らもむしろ生徒と学校の間を仲裁しようとしていることがわかる。生徒側は、最初は壁新聞やチラシを印刷して配布するなどして息巻いていたが、やがて闘争に倦み、また、勉学の遅れへの焦りもあり、保護者や教授陣の説得に応じて、生徒らは俊次郎と和解するに至る。生徒代表8名が謝罪文を提出し口頭でも陳謝、学校側は生徒らの停学処分を解いた。

初代事務局長で保健衛生理論の教員でもあった和田安民氏(後に教養部長)が、同盟休校事件の新聞記事や生徒の配布物を2冊のスクラップブックに残している(写真9)。また、奉書紙に墨筆で書かれ畳紙に収められた立派な陳謝書が残る。そこには一連の騒ぎが「生徒一同の浅慮不才」による「不徳誤解に基づける過失」であることを認めて陳謝している。許しを請うべき浅慮として、檄文をマスコミに流したことや、三田校長に不信任状を提出したこと、当初保護者らの説得に応じなかったことなど13項目を並べて陳謝している。



写真9

『岩手医科大学四十年史』(1968年6月)は第18回直木賞を受賞した森莊巳池氏が編集し、年史の執筆を担当しているが、当時、森氏は岩手日報の整理部記者として報道部松本政治氏の取材した記事を整理したという。森氏は、『四十年史』に松本氏の「医専ストライキ事件追憶」という原稿を掲載している。松本氏は、「私はこの事件を通して三田俊次郎先生と争い、ケンカもした。しかしこれを機として、ついには先生の知遇を得るに至ったのであった。往時を追懐して、うたた感慨無量である」と書いている。若く気鋭の新聞記者たちが、医学生を思い、マスコミとして彼らを応援する気持ちから行動したことがわかる。

終わってみれば、俊次郎も、教授陣も、生徒も、保護者も、よりよい医育への道筋を見定めていたという点で軌を一にしていたといえよう。

ちなみに医学教育制度が施行錯誤をしていたこの時期、各地の医学校でこのような生徒と学校側の紛糾が起こっている。わずか20日で和解に至ったのは幸いだったといえよう。



写真10 昭和6年(1931)12月6日撮影衛生検査部第1回卒業記念写真

6 衛生検査部

三田俊次郎が建学の精神として済生救民を第一に掲げていたことはすでに述べた。開学してすぐ生徒たちはその精神を実践活動に移す。衛生検査部の誕生である。

昭和3年の開学した年にすでに衛生検査部が結成されていたことがわかる。衛生検査部は現在も続いているから実に90年にわたって地域診療を陰で支える部活動が継続していることは驚くべきことである。

本学附属図書館には第1号(1932年)から第9号(1940年)までの部誌も保管されている。創刊号の目次をみると活動内容が一目瞭然である。

| | |
|---------------------------------------|----|
| 一. 巻頭言 / 部長 医博 佐藤三千三郎教授 | 1 |
| 一. 無料衛生検査部設置に際して / 岩手医学専門学校校長 三田俊次郎先生 | 2 |
| 一. 所感 / 医博 三宅徳三郎教授 | 4 |
| 一. 沿革及び使命 | 6 |
| 一. 組織及び事業 | 11 |
| 一. 日誌 | 14 |
| 一. 研究及び事業報告 | 17 |
| 講演論文 | |
| 一. 寝冷の話 / 医博 根本四郎教授 | 31 |
| 一. 最新治療法二三について / 医博 工藤祐三郎教授 | 35 |
| 一. アトファニールの臨床的効果について / 医学士 藤井敬三 | 38 |
| 一. 疫痢の予防及び手当 / 医博 根本 四郎教授 | 43 |
| 一. 体質と疾病との関係について / 医博 佐藤三千三郎教授 | 53 |
| 一. 胃癌の転移について / 医博 三宅徳三郎教授 | 62 |
| 研究報告 | |
| 一. 昭和5年衛生検査部主催衛生展覧会について | 67 |
| 一. 盛岡市に於いて測定せる血圧と年齢について | 69 |
| 一. 裸参りの検尿成績 | 71 |
| 一. あけぼの保育所児童体格検査報告 | 73 |
| 一. 仁王小学校生徒糞便検査第一回報告 | 74 |
| 一. 小学校児童の血謨測定報告 | 76 |
| 一. 昭和6年度ウインタースポーツについて | 76 |
| 一. 中等校氷上選手の尿検査報告 | 77 |
| 一. 二戸郡田由村出張診察について | 77 |
| 一. 昭和6年度盛岡市本校入学志願者の年齢と体重と血圧との関係について | 79 |
| 一. 岩手郡御堂村出張診察について | 80 |
| 一. 中野村中野小学校に於ける無料診察 | 81 |
| 一. 備品 | 82 |
| 一. 会計報告 | 82 |
| 一. 部員名簿 | 84 |
| 一. 部員感想 | 85 |
| 一. 4年生の言葉 | 86 |
| 一. 編集後記 | 87 |

『部報』の「衛生検査部ノ沿革ト使命」によると、三田俊次郎を「総理」とし、佐藤三千三郎を部長とし臨床系の医師9名を顧問として学生部員を実行委員に定めている。「学生ノ社会ヘノ法師事業ノ一端トシテ」誕生し、無料の医学検査をして社会衛生の向上に貢献するとともに、学生の臨床研究に資するための創部であったようだ。「広汎ナル医学ノ課セラレタル使命又ハ任務」を「科学トシテノ医学ニ課セラレタル道」に即して進むという壮大なものであった。社会的役割があるため「学友会トハ別箇ノ存在ヲ示シ」、学校の指導下にある教員学生協同の組織であったことがわかる。「経費ハ全ク全学生ノ拠金ニヨルモノデアッタ」という。つまり岩手医専全学生が活動資金を拠出していたのである。

『岩手医科大学五十年史』（森荘巳池編1978年6月）には当時の主将・歯学部第9期生・大塚誠による次のような総括がある。

衛検はフィールド活動を通じて、将来医療に携わる者としての自覚と責任のもとに、現在の医療というものを正確に把握し、更には医療のあり方を日常の生活の中で考えていこう、というクラブである。

昭和三年、医専創設と同時に誕生。今日に至る医大最古のクラブである。当時は学生の社会への奉仕活動の一環として、検査・出張巡回無料診療・衛生調査を中心に活動してきたが、その後個人衛生に重きを置いた衛生活動が行なわれ、これらはいずれも医師主体の事業的性格の強い活動であった。昭和一九年戦争で活動が途絶えたが、三一年衛検再建後、県国保連を通じての活動が学生主体に行なわれ、四〇年には県からの活動も加えられ、四二年に歯科のチームが新たに編成され現在に至っている。

部員総数は現在三〇数名で、国保連及び県を通じての、医系は貧血・高血圧・脳卒中問題を、歯系は小児ウ蝕減少をめざした口腔衛生活動を、夏期フィールドを中心に活動している。また当面の課題はOB会の結成・フィールドワーク論及び自主フィールドの開拓と確立・部屋の拡大・部員数の増加を計り、更に優れた活動をめざすこと等で、これらに対し、文化部一と自負できる程の積極的な活動を行えるよう部員一丸となって努力している。(主将 大塚誠)

岩手県の済生救民のために創立された本学の面目躍如たるクラブ活動といえる。このクラブ活動が岩手県内の保健衛生活動に連動していくことになる。

以上、岩手医専創立前後のトピックの概要である。20年に及ぶ岩手医専の教育活動の中でそのほかにも特筆すべきことがらは多く、とりわけ第二次世界大戦前後の厳しい社会情勢のなかでもたゆまず医育への道を歩んだ軌跡は特筆に値するが紙幅の関係でいったんは稿を閉じることとする。以後の歩みについては別稿を期したい。

【付・翻刻「現代ノ医学」】

B 4版400字詰め原稿用紙2つ折り仮綴、42枚、表紙は別紙（「現代ノ医学と朱書き。青鉛筆で右下に「昭和三年六月／於岩手県医学専門学校」

子爵 後藤 新平

「現代ノ医学」ト云フモノニハ、善イコトト悪イコトト両方ガアルヨウデアアル、勿論現代ノ医学ガ昔ニ比シテ一夫大進歩ヲ為シテ居ルコトハ事実ニ相違ナイガ、併シ或ルー方カラ観ルト又墮落シテ居ルトモ言ヘヌコトハナイ、医学ハ人生ニ極メテ密接ナル関係ヲ有スル学問デアアルカラ、其研究ガ微ニ入り細ヲ穿ツコトハ固ヨリ必要デアアルガ、余リニ一方ニ偏シテ、ソレガ為ニ全部ト一部トノ関係ガ分ラナクナルヤウニナツテ来テハ茲ニ惑ヒヲ生ズルノデアアル、畢竟専門専門ト言ツテ只管専門ノミヲ重シトスルノ傾向ガ遂ニ茲ニ至ツタコトト考ヘル、而シテ眼科ノ専門、耳鼻科ノ専門ト云フガ如ク自己ノ専門トスルー科ニ偏シテ、全身ノ疾患ハ更ニ之ヲ顧ミナイト云フヤウニナツテハ、是レ其

本ヲ忘レテ末ヲ重シトスルモノデアル、而シテ今デハ、「ソレハ余ノ専門デナイカラ」ト言ヒサヘスレバ、其人ハ其専門ノコトニ非常ニ精シキカノ如キ感ヲ人ニ与ヘ、同時ニ専門外ノ事ハ惜イテ顧ミナカッタ其人ノ欠点ヲ補フ言葉トシテ人モ許シ、吾モ満足スルヤウナ状態ニナッタ、

今日此学校ガ医学ノ普及、医学ノ民衆化ヲ図ルガ為ニ設立サルルニ至ッタコトハ、洵ニ慶賀ニ堪ヘヌ次第デアル、而シテ医学校トシテ時代ニ相応ハシキ医学上ノ設備ヲ有シナケレバナラスコトハ申ス迄モナイガ、全部ト一部ノ関係ヲ終始念頭ニ置イテ、学校ノ設備ノ上ニモ其宜シキヲ得ナケレバナラスト思フノデアル、

私ガ医学ヲ修メタノハ今カラ五十五年モ昔ノコトデアッタ、当時福島県須賀川ノ医学校ハ最モ良イ医学校デアッタケレドモ、無論現今ノソレト比較シテ見タナラバ、全ク幼稚ナモノニ相違ナカッタ、併シ医学ヲ修メル上ニ於テ其ノ意気込ミ、精神ト云フモノハ實ニ澁刺タルモノデアッタ、単リ医学許リデナク、何ノ学問ヲ修ムルノモ同ジデアルガ、殊ニ医学ニ在ッテハ之ヲ学バントスル者ノ精神ノ置キ所、意気込ミノ如何ハ大切ノコトデアル、澁刺タル精神、真剣ノ意気込ミハ学窓ニ入ッテヨリ卒業スル迄、否ナ卒業シテカラ社会ニ出テ医術ヲ以テ世ニ立ツ後迄モ終始一貫シテ持ッテ居ラナケレバナラス、而シテ当時私ノ学シタ須賀川ノ医学校ハ、今日此学校ニ各専門ノ科ガ分立シテ、ソレゾレ完備シタル設備ヲ有スルモノニ比較スルト、實ニ不完全ナモノデアッタガ、私ハサウ云フ学校ニ於テ医学ヲ修メタノデアル、往時ヲ追懐シテ今日此学校ヲ見ルト、私立デアリナガラモ尚且ツ斯ノ如ク整頓シタル設備ヲ有シテ居ル、斯ク堂々タル医学校ヲ創立セラレタト云フコトハ、實ニ偉大ナ事業ヲ成就サレタモノデアッテ、其苦心ノ程モ察スルニ余リアルノデアル、

ソレハ僭倖イテ私ガ科学(サイアンス)ノ知識ヲ得ルノ門ニ入ッタノハ、全ク医学ヲ修メタ為メデアッタト今日デモ思ッテ居ル、サウシテ人類ノ細胞ガ人工デ出来ルト云フコトヲ初メテ聴イタトキニ有頂天ニナッテ、人生何事モ科学ノ力ニ依テ出来ナイコトハナイト思ッタ、所ガ二十歳ノトキ名古屋ニ転任シテ司馬凌海先生ニ就イテ学シタ、此人ハ東京デモ当時大變有名ナ学者デアッタガ、素行上ニ非難ガアッテ余儀ナク東京ヲ去ッテ名古屋ノ病院ニ転ジタノデアル、此先生ノ詩ニ

非纒才究五方学　多事還累六尺身
畢竟清時無所用　還為自主不羈民

ト云フノガアルガ、本当ニ五方ノ学ヲ究メテ、英仏独希臘羅典ノ語ニ通ジテ居ッタ、而モホンノ門ヲ窺ッタト云フ丈ケノコトデナク、充分ニ其堂奥ヲ究メテ居ッタ、サウ云フ人ノ所ニ私ハ往ッタ、一方デモ出来ナイ不肖ノ子ト云フカ不肖ノ弟子デアル、サウシテ前ニ言ッタ人間ノ細胞ガ人工デ出来ルト云フトコロカラ無神論ニナッテ了ッタ、怪シイ無神論デアッタガ、其無神論ガ今度ハ有神論ニ変化シタコトヲ一寸話シテ見ヤウト思フ、司馬先生ノ所ニ「無神哲学有神哲学」ト云フ本ガアッタ、百科全書ノ類デアル、サウシテドチラニモ「ウン・エルクレーバルウルサッヘ」ト云フ字ガ書テアル、「説キ明カスベカラザル原因」ト云フコトデアル、ソコデ自分ハ茲ニ一ツノ疑問ヲ生ジテ来タ、ソレカラ先生ニ聴イテ見ルケレドモドウモ能ク分ラナイ、先生ハ字義ハ説キ明カスケレドモ事柄ガ分ラナイ、其内ニ不審ニ強迷スル時ニ或日、東本願寺ノ大学林ノ教頭ノ細川千巖ト云フ人ガ「ドクトル・ローレッツ」ノ診察ヲ受ケニ来テ、ソレカラ後ニ私ハ代診ニ往ッタ、サウシタ所ガ端ナク物質保続ノ学、物力保続ノ学ト云フ話ニ至ッタ、サウシテ西洋ノ学説ハ斯ウ云フモノダト云フノデ私ハ説イテ話居ル中ニ、神ダノ仏ダノト云フモノガ有ルモノカト云フ意味ニ涉ッタ話ヲシタ、先方ノ黙シテ謹聴シテ居ッタ、其事ヲ話シタ後ニ二三日経ッテ又往ッタ所ガ、大變今日ハ気分モ良シ、咳嗽モ止ッタ、飯デモ一緒ニ食ベテ往カヌカト言ハレルカラ「御馳走ニナリマセウ」「ソレデハ此間西洋医学ノ話ハ面白カッタガ私ハ御当流ノ真俗ニ體ノ説ヲ話シマセウ、貴方聴ク暇ガアリマスカ」「ソレハ伺ヒマセウ」ト言ッタ、ソレカラ飯ヲ食ッテ話シ出シタ、サウシタ所ガ滔々ト三時間程モ続ケテ話シテ聴カサレタ、サウシテ其中ニ「真如法性ノ理體ガ無明ノ因ニ依ッテ俗體ニ化ス」ト云フコトガアル、是ガ即チ森羅万象人類其他ノ物ニ化スノデアル。サウスルト始アリ終アリ生死ト云フモノガ出テ来ル、是ガ仏法デ謂フ因果ノ道理ノ原因デアルト云フコトノ話ガアッタ。此話ヲ三時間計リ滔々ト聴カサレタ、ソコデ無明ノ因ト云フコトハ「ウム・イルクレーバル」ト云フコトト同意義デ、ドウシテモ天地万物ノ一大原因、人間ヲ超越シタカト云フモノガ確ニ有ルモノダト云フコトノ概念ヲ得タ、ソレ迄大ニ自分ガ疑ヲ持ッテ居ッタ点ニ就テ、之ヲ解ク資料ヲ得タノデアル、ソコデ私ハ有神論ニ変化スルヤウニナッ

て来タ、斯ウ云フ思想上ノ変化ヲ見タコトハ、今カラ考ヘテ見ルト私ノ生涯中非常ナ精神上ノ大変化デアッタ、而シテ無神論ガ有神論ニ変化シタコトハ、総テノ問題ヲ解決スル根本ヲ成スニ至ッタノdeal、即チ實際ニ科学ガ幾ラ進歩シテ往ッテモ、機械的ノ作用ヲ総テノ事ヲ説明スルコトハ出来ナイト云フコトヲ知ッタ、

今日唯物史観ノ説ガ盛ニ行ハレルケレドモ、一方、唯心史観ノ区域ガ欠けて居ルヤウニ思フ、

ソコデ物心一如ト云フコトガドウシテモ人類生活ノ妙諦デアッテ今日ノ学問ガ如何ニ開ケテ往ッタ所ガ、ドウシテモ生活ノ原因ヲ機械的ニ説明スルノミデハ、未タ盡サザルモノガアル、

ソコデ一部デハイカヌ、全部ノ関係ヲ明カニスルト云フコトデナケレバナラヌカラ、全部ノ関係ヲ明カニシテ進ムト云フコトガ第一義deal、而モ医学ヲ専門ニヤル人ガ、此問題ヲ理解スル立場ニ在ルノdeal、今日ハ物理・化学・解剖・生理ト云フヤウナ医学ノ基礎学問ガ非常ニ盛ニナッテ来タガ、是ト同時ニ医学ヲ修ムル者ハ漸次心理方面ヲ開拓スルコトモ亦必要ニナッテ来タ、医学ハ物質的ノ科学ノ進歩ニ俟ツモノ頗ル大ナルモノガアル為ニ、之ヲ研究スル間ニハドウシテモ初メハ物質的ノ科学ニ支配セラレル傾向ヲ免レヌガ、併シ心理ノ方面ノ進歩ヲ加味スルニ非ラザレバ完全デナイコトガ分ッテ来タ、例ヘバ今日ノ進歩シタル哲学ハ、昔ノヤウニ科学ヲ無視スルコトガ出来ナイ、随テ哲学ト科学トハ相對峙スルモノデアルト云フガ如キ觀ヲ呈スルノハ恐クハ誤リ多キコトデアラウ、殊ニ今日精神病学其他ノモノガ開ケテ来タ所カラ、逆ニ医学方面ヨリ心理方面ノ研究ガ進ンデ、物心一如ノ域ニ進ムデアラウ、サウシテ此点カラモ一部ト全部トノ関係ガ大ニ必要ニナルデアラウト思フ、現ニ西洋ノ哲学ガ今日デハ東洋哲学ヲ取入レテ、東洋ノ在来ノ学問ガ尊崇セラレルヤウニナッテ来タ、「シヨッペンハウエル」ノミ独リ哲学ノ系統ヲ立テテ往ッタヤウニアッタケレドモ、今日デハ総テガ東洋哲学ヲ取入レテ研究スルヤウニナッテ来タコトヲ見テモ明カdeal、固ヨリ人間ノ智能ニ限りガアルカラ、一人ガ総テノ事ヲ知ルコトハ不可能deal、故ニ学問ニ分科ガアリ、分科ニモ亦各々専門ハアル

ガ、学ンダリ教ヘタリスルニ便利ナ為ニ出来タ専門dealガ、専門研究ハ往々ニシテ片輪ヲ生ズルノ弊ニ陥ルモノdeal、患者ヲ診察シテモ精神上ノ関係ヲ除外シテ唯物質的ニ計リ見テ其原因ヲ攻究スルノデハ、決シテ全医学ノ功德ヲ施スコトハ出来ナイ、法律家ハ法律ヲ以テ人生ヲ支配スル偉大ナル力ノアルモノノ如ク信ズル者モ世間往々アルガ、併シ法律ト云フモノハ畢竟人間ノ定メタ所ノ規準ニ過ギナイノデアッテ、而モ物心一如デナケレバ欠点ノ著シキモノガアルノdeal、現今法律家ガ近来指紋ヲ研究スルコトニナッタガ、茲ニ大ナル物心一如ノ妙機ノ存シテ居ルコトガ明カニナッテ来ルノdeal、随テ法律ハ医学ヲ離レテ存在スルコトハ出来ナイ、殊ニ裁判医学即チ法医学ハ實ニ之ヲ語ッテ審カナルモノdeal、今日ノ医学ハ法律万能ノ間ニ生存シテ居ルガ、更ニ之ヲ超越シテ医学万能ノ時ヲ開拓實現スルニ非ラサレバ、真ニ人生ノ幸福ハ得ラレヌヤウニ思ハレル、ソコデ先ツ医学ノ専門ト云フコトヨリモ一般ノ医学ノ関係ヲ明カニシテ然後ニ専門分科ニ入ルルコトガ肝要deal、此医学校ニ学ブ所ノ人ハ能ク此等ノ道理ヲ明ニシテ、而シテ其将来ノ方針ヲ定ムルコトガ必要deal、今日専門々々ト云ッテ、専門ハ片輪ノ異名ナリト云フヤウナコトニナッテ往クノハ、是レ全ク一部ト全部トノ関係ト云フコトヲ、深く攻究セザルノ罪ニ座スルコトト思フノdeal、此医学校ハ固ヨリ今日専門分科ノ精緻ナル関係ヲ等閑ニスルコトハ出来ナイガ、医学ノ一般ノ民衆化ト云フコトヲ心ニ期シテ、実学实用ヲ試ムコトノ大切ナルヲ忘レテハナラヌ、要スルニ医学其物ガ専門分科ニ別レ、サウシテソレニ依ッテ片輪ニモナルガ、又医学ガ社会学ノ基礎ヲ成スト云フコトハ、是ハ争フベカラザルノ事實deal、ソレ故ニ医学者自ラ医学ノ基礎ノ斯ク広汎ナルヲ明ニシ、以テ社会全般ノ幸福ヲ産ムコトニ努メナケレバナラヌ、蓋シ医学ノ使命ハ頗ル大ナルモノdealカラ、一部ト全部トノ関係ハ医学其物ノ中ニモアルケレドモ、又医学ト他ノ学科トノ上ニモアルコトヲ知ラネバナラヌト思フ、

次ニ日本ニ於テハ西洋医学ト漢法医学ト別レテ居ルガ、今ヤ漢法医学ハ殆ト無クタッタコトニナッテ居ル。併シ西洋医学ト漢法医学トハ別物dealト云フ考方ハ間違deal、日本ノ医学ハ一時ハ漢法医学ヲ主トシテ居ッタガ、蘭学又ハ西洋ノ医学ニ依ッテ今日ノ域ニ進歩シタ、

其進歩シタノハ日本医学デアッテ、日本医学ガ本ニナッテ居ル、ソコニ西洋医学トカ漢法医学トカ云フ區別ハナイ、況ンヤ漢法医学ハ非常ナ昔ニ於テ進歩シタモノデアッテ、今日翻ッテ之ヲ觀ルトドウモ漢法ヲ棄テルコトガ出来ナイヤウニ見エルノモ無理ナラヌコトdeal、

要スルニ西洋医学・漢法医学ト云フ區別ヲシテ居ルノガ間違デアッテ、日本医学ト云フモノハ、日本ニ於テハ西洋並ニ漢法医学ヲ包容シテ進化シ大成シテ出来タノデアアル。日本医学ハ物心一如ノ医学デアッテ、西洋ノ如ク物質科学ノミヲ本トシテ居ナイカラ之ヲ大成スルコトガ出来タノデアアル、少名彦古命ガ医薬禁厭ヲ崇メ玉ウコト其祖デアアル、今日漢法医学モ決シテ等閑ニ附スルコトノ出来ナイ事實ガ現レテ来タノデアアルカラ、此学校ノ学生ハ此辺ニモ細心ノ注意ヲ拂ッテ研究ヲ怠ラヌヤウニシナケレバナラヌト思フ、

ソレカラ前段ニ司馬凌海ノコトヲ一寸述ベタガ、此先生ニ就テ学ンダ頃ノ私ノ過去ノ履歴ヲ述ブルコトモ或ハ学生諸氏ニ何等カノ参考ニナルト思フニ付テ一寸其話ヲスル、ソレハ先ニモ言ツタ通り私ハ奥州ノ須賀川ノ医学校ニ学ンデ、サウシテ一年半計リ経ツト舎長ニナツタ、三年立ッテ卒業シタ、ソレカラ名古屋ニ出テ、司馬凌海先生ノ許ニ往ツタ、司馬先生ハ芸術家肌ト言ハウカ芸人肌ト言ハウカ極メテ磊落ナ人デ、素行ノ上ニ非難モアツタ為ニ東京ヲ去ラネバナラヌコトニナツテ名古屋ニ来タノデアアルガ、此先生ガマダ東京ニ居ツタ頃、東京大学ノ医学部ニ独逸カラ「シュルレル氏」「ホフマン氏」ト云フ医学ノ先生ガ来タ、ケレドモ当時ハマダ東京大学ノ中ニ独逸語ヲ話ス人ハ誰モナカッタ、其頃東京横濱間ニハ勿論鐵道ガナカッタカラ馬車デ通フヨリ外、仕方ガナカッタガ、凌海先生ハ馬車デ三四度横濱ニ通ッテ独逸語ヲ学ンダ、ソレデモウ独逸語ガ話セルヤウニナツタ、サウシテ黙ッテ居ツタ、ソコニ「シュルレル」「ホフマン」ガ来タノデ、流暢ニ独逸語デ挨拶ヲ交シタノニハ列座ノ教授先生皆ナ舌ヲ捲イテ了ツタ、

サウ云フ語学ニモ天才ノ人デアツタノデ、却テ他人ノ猜疑心モアリ嫉妬心モ手伝ッテ、大学ノ少博士ヲシテ居ツタノヲ免ゼラレテ、ソレカラ一時ハ元老院ノ少書記官ヲ勤メテ居ツタ、是ハ河津祐之（帝大教授河津暹氏ノ巖父）ト云フ人ガ凌海ノ才ヲ惜ンデ元老院ニ推薦シタノデアアル、後幾モナク元老院モ罷メテ今度ハ名古屋ニ医学校ガ建ツト云フノデ其ノ方ノ教授ニナツテ、三百円ノ月給デ赴任スルコトニナツタ、其中ニ東京ノ警視庁デリヨン氏ノ裁判医学及衛生警察学ノ原書ヲ翻訳サセヤウト思ツタガ、当時法律書モ読メテ且ツ医学ノコトニモ明カナ、両方ノ学問ノ出来ルヤウナ人ハナカッタノデ、司馬先生ガ其翻訳ヲ頼マレルコトニナツタ、所ガ此先生ハ先ニ言フ通り芸術家肌芸人肌ノ人デアアルカラ、毎日几帳面ニ翻訳ナドハシナイ、月末ニナツテ金ガ要ルヤウニナラヌト翻訳ヲ始メナイ、翻訳ヲスルトソレヲ警視庁ニ送ッテ金ヲ取ッテ、其金デ豪奢ナ生活ヲシテ居ツタ、学校カラ三百円貰ッテ居ツタガ、ソレデモ足りナイデ又三百円以上翻譯テ取ッテ居ツタ、サウシテ私塾ヲ開イテ居ツタ、ソコデ私ガ名古屋ノ医学校ノ教諭ノヤウナコトヲヤツテ、ソレカラ名古屋病院ノ当直医モヤツテ居ツタガ、司馬先生ノ塾ニ居ル方ガ良イト思ッテ塾ニ入ルコトニシタ、塾生ハ十五六人位シカ居ラナカッタガ、程ナク私ハ塾長ニナツタ、私ヨリ先ニ滝波図南ト云フ男ガ居ッテ塾長デアツタ、此人カラ独逸語ヲ私ハ初メテ学ンダ、兎ニ角私ガ塾長ニナツテ、滝波ガ上席デアツタ、所ガ月末ニナルト「今夜滝波サント後藤サンニ外ニ出ナイデ居ッテ下サイ」ト言ッテ来ル、サウスルト其晩ハ翻訳ヲスルノデアアル、其翻訳料ガ其時分一枚一円五十銭デアッテ、ソレヲ一枚書クト十五銭貰ヘタ、先生ハ何ノ苦モナクスラト翻訳ヲスル、ソレヲ筆記スルノデアアルガ、翻訳ノ途中デ「何デスカ」ト問返シデモスルト氣ニ入ラナイ、後藤サン疲レタカラ滝波サンヲ呼ンデ来イトヤル、滝波ガ代ッテ筆記シテ又問返シデモスルト、後藤サンヲ呼ンデ来イト云フヤウナ訳デアツタガ、一晚ノ中ニ四五十枚位ハ造作モナク翻訳シタ、ソレデアアルカラ金ガ欲シケレバ毎晩翻訳シテ居レバ良ササウナモノデアアルガ、ソコガ芸人肌デ出来ナイ、金ノ要ル時ガ迫ッテ来ナケレバヤラナイ、其代リ三四晩位勉強スルト云フト忽チ十行二十字ノ原稿ガ二百枚位出来ル、サウスルト三百円又四百円ニナル、其頃ノ三百円ト言ヘバ莫大ナ金デアアルガ、ソレヲ悉ク使ツタノデアアル、サウ云フ芸人肌ノ面白イ人デアアル、サウシテ私ガ筆記ヲシタオ蔭デ裁判医学トカ衛生警察ト云フモノハドンナモノデアアルカト云フ要領ヲ悟ルコトガ出来タ、サウシテ先生ハ翻訳中ニ、此処ハ翻訳シテモ外ノヤツニハ分カルマイカラ除イテ置クガ、併シ君ハ聴キタカラウカラ話丈ケスルト言ッテ話ヲシテ呉レタ、併シ何処ヲ省イタカ氣ガ付カヌヤウニ立派ニ翻訳ガ出来テ居ル、ソレカラ後ニ「ドクトル・ローレッツ」ニ裁判医学ノ話ヲシタ所ガ、「ローレッツ」ハ驚イテ、君ハドウシテ裁判医学ヲ知ッテ居ルノカト聴クカラ、実ハ司馬先生ガ翻訳スルノヲ私ガ聴イタカラ知ッテ居ルト言ツタヤウナ訳デアツタ、其内ニ医学校デモ「ドクトル・ローレッツ」ガ裁判医学ノ講義ヲ生徒ニ聴カセルコトニナツタ、其頃マダ何処ノ医学校デモ裁判医学ナドハ少シモ授ケテ居ナカッタガ、名古屋ノ医学校丈ケハ率先シテ裁判医学ノ講義ヲスルコトニナツタ、サウシテ私ガ副教諭ヲシテ居タ傍、「ドクトル・ローレッツ」ノ裁判医学ヲ聴講シタコトガ、後日相馬事件デ牢ニ入ル因縁ニナツタノデアアル、明治十六年ニ東京ニ赴任シ

テ来タトキニハ、マダ裁判医学ナドハ東京デモ真暗闇デアッタ、其真暗闇ノ所デ裁判医学ノ問題ヲ具体化シタノガ相馬事件デアアル、相馬事件ニ座シテ私ハ一時監獄ニ繋レルヤウニナッタノモ、時勢ニ先ツテ之ヲ学ビ、真暗闇ノ世ノ中ニ裁判医学ト云フモノヲ明カニシタイ為デアッテ、決シテ名ヲ博センガ為ニ政府ヲ苦シメンガ為ニヤッタコトデハナイ、ソコニ今日政治ノ倫理化ヲ主張スル原因、私ノ真剣味ガアッタノデアアル、私ノ精神ヲ打込メタ非常ナ努力ガアッタノデアアル、相馬事件ハ不具ノ妻（先天臍閉鎖症「アトレシアヴァギナ」）ヲ嫁シテ誠胤其人精神病ナリトシテ鉄窓ニ監禁シタノデアアル、而シテ東京帝国大学デ医学ヲ修メナケレバ偉イ学者ニナレヌト云フコトモ一応私ハ信ズルガ、必ズシモ悉ク然リトモ信ジナイ、故ニ此医学校計リテ学ンデモ其人ノ精神次第デ偉イ者ニナレト云フコトヲ確信スルモノデアアル、

要スルニ精神ガ第一デアルト云フコトヲ断言スルモノデアアル

【謝辞】

本稿執筆に際し、奥州市立後藤新平記念館及び同館学芸員の中村淑子様、また、岩手日報社には貴重な資料の閲覧と資料掲載に関して多大なるご理解とご協力を賜った。記して感謝申し上げる。